

## 2週間身体拘束され続けている患者さんに出会った衝撃

国際医療福祉大学大学院修士1年 栗井小枝

一番印象に残ったのは、精神科病院の話でした。私は、国際医療福祉大学医療福祉・マネジメント学科を昨年卒業したのですが、学部4年次には、「精神保健福祉援助実習」がありました。社会福祉士と精神保健福祉士のダブル受験のため、精神保健福祉士の実習が必修でした。精神科病院と地域の精神障害者施設への実習です。

精神科病院の実習は、保護室で、身体拘束をされている女性患者の様子を、その場で観察する機会がありました。ベッドに横になり、上下肢胴抑制がされていました。わずかに頭が動かせるだけで、足には点滴がされていました。

ソーシャルワーカーが話しかけても、点滴で薬が入られているため、ポーっとして、ろれつが回らない状態でした。髪の毛は、数日洗髪していないと思われるベトベトな状態でした。排せつはおむつ、食事は看護師が介助で食べているとのことでした。

夏なので、患者は上は半そで、下はおむつのみ、タオルケットを掛けているだけの状態でした。エアコンが効きすぎていて、じっと横になっているだけでは寒いのではないかと思うくらいでした。しかし、興奮を抑えるため、薬で過鎮静状態であったため、寒い、かゆい、痛い、どうしたいかなど、言える状態ではなかった事を覚えています。

私が、その患者さんに会った時は、入院して上下肢胴抑制をしてから、すでに2週間が経っていると聞き、大変驚きました。2週間もあの状態のままなのか、とショックを受けました。拘束されている人を見るのも初めてで、それだけでもショックだったのに、長期に渡って拘束されている事実を知り、さらにショックを受けました。いつ拘束が解かれるのだろうと、心配になりました。

「治療のために、患者さんに必要だから、拘束しているんだよ。」と実習担当のソーシャルワーカーが教えてくれました。

私は、治療に必要なだからと、医療の現場で許されている身体拘束について、疑問が残り、ソーシャルワーカーに、「あの姿を家族や友人が見たら、とても悲しむのではないのでしょうか。」と質問しました。

ソーシャルワーカーは、「僕たちは、この光景が日常だから、当たり前になってしまって、そんな風を感じることも無くなってしまっている。その気持ちを忘れないで欲しい。」と答えてくれました。

今も脳裏に焼き付いて、すぐにも思い出せるくらいの衝撃的な出来事でしたが、日本の医療はまだまだ発展していないのだと感じさせられました。私の実習先の病院は、国立の大変有名な精神科病院だったため、余計にそう感じざるを得ませんでした。

先生の講義を受け、日本の精神科医療について、再び考えさせられました。ソーシャルワーカーの話にもあったように、人間はその状況に慣れてしまうと、悪いことだとしても、疑問に思わなくなることがあるのだと思いました。

一緒に卒業した友人が、現在この病院で、精神保健福祉士としてソーシャルワーカーで勤務しています。1年目なので、とても驚きがたくさんだと話しておりました。しかし、初めの頃よりは、拘束していることに慣れてしまい、「仕方ない」と思うようになった、と話していました。そういうことになってしまうのですね

人権、権利擁護、ノーマライゼーションなど、当たり前にあるべきものが、当たり前でないこの国。もっとアンテナを高く掲げて、視野を広く持ち、真実と虚偽を見分けられる目を養っていきたいと思いました。